

「補足」

～また、同じ有様で～

ルカの福音書 9:28

1. 多くの聖なる人々

前回取り上げた内容の一部が、今日の教会ではあまり知られていないものでしたので、少し補足をさせていただきます。イエシュアとともに山に登った三人の弟子たち、ペテロすなわちケファ、そしてヨハネとヤコブ。彼らはそれぞれ、終わりの日に救われる民、すなわちメシアであるイエシュアが再臨され、地上にお建てになる「神の国」千年王国、メシア王国とも呼ばれるその御国に入り、イエシュアとともにそこを治めるために一つの民とされる三つの存在が指し示されていると述べました。すなわちそれはケファの中に、虐げられ、追い出された者たちが逃げ込む「岩」という意味があり、それはやがて獣と呼ばれる反キリストに追いつめられるユダヤ人たち、「イスラエルの残りの者」と呼ばれる存在を指し示し、次にヨハネはイスラエルにつながる異邦人、すなわち私たち教会を指し示していると述べました。

そして最後にヤコブとは、その名からイスラエルの子ら、イスラエルの民を指し示しており、イエシュアが十字架にかかれる以前に死んだ旧約時代の聖徒たち、すなわちイスラエルの神、主を唯一の神として信じたすべてのイスラエルと、そしてそれにつながった在留異国人たちをも指し示しているのです。この旧約時代の多くの聖徒たちについて、前回以下のように言及しました。

マタイの福音書【新改訳 2017】

27:50 しかし、イエスは再び大声で叫んで霊を渡された。

27:51 すると見よ、神殿の幕が上から下まで真っ二つに裂けた。地が揺れ動き、岩が裂け、

27:52 墓が開いて、眠りにっていた多くの聖なる人々のからだが生き返った。

27:53 彼らはイエスの復活の後で、墓から出て来て聖なる都に入り、多くの人に現れた。

イエシュアが十字架で死なれた時に「墓が開いて、眠りにっていた多くの聖なる人々のからだが生き返った」という出来事が起こりました。これは比喻でもまぼろしでもなく、実際に起こった事実として記されています。皆さん、この驚くべき状況を今想像してみてください。朽ちない身体によみがえらされた多くの人々がエルサレムに入って来たのです。「聖なる人々」とありますから、そこには王の墓に葬られていた、あのダビデやソロモンなどはもちろんのこと、墓の場所が限定されていないのでエルサレム以外の場所で死んだ旧約時代の多くの預言者たち、当然父祖アブラハム、イサク、ヤコブといった、そうそうたる顔ぶれもあったことでしょう。普通ならば街中大パニックに陥るはずだと私たちは考えます。しかし、この驚くべき出来事について、またこれを目の当たりにした当時の人々の反応について、ありえないほどに聖書は沈黙し、これを取り扱ってはいません。イエシュアの十字架の死と復活を扱った多くの映画、ドラマを見ましたが、この事実についてはほとんど映像化されていません。多くの説教者たちも同様で、神殿の幕が裂けたというその前の記述については、その幕は厚さが 20cm もあったなどと、聖書に記していないことまで持ち出して深く説こうとするのに、この「聖なる人々」聖徒の復活については、一様にお茶

を濁します。これは一体どういうことでしょうか。しかしこのような神の御業が実際に目に見える形で大いに現れているにもかかわらず、ほとんど誰も気づかない、そんなことあり得ないと言って否定するというような状況は、この出来事だけに限ったものではありません。前回登場したモーセとエリヤによって現わされた数々の超常現象に対する、王たちのかたくなな態度などはまさにその典型です。他にもイエシュアがマリアのお腹からお生まれになったその夜、おびただしい天の軍勢がベツレヘム近郊の空中に現れました。しかしそれを見たのはわずかな羊飼いたちだけだったというのです。あの周辺は高い山や建物などありません。現れたのはおびただしい数の天の軍勢だったのです、おそらく全天を覆うほどのものだったでしょう。さらにそれらが大声で神をほめたたえて歌ったともあります。ユダヤ全域はおろか、中東全域にまで響き渡っていても不思議ではありません。しかしそれが最も近いはずのベツレヘムの人々にさえ見え、聞こえたという記述が一切ないのです。この他、ゲツセマネの園でイエシュアはご自分を捕らえに来た人々を、言葉の力だけで吹き飛ばし、また耳を切り落とされた者を瞬時に癒されました。しかし人々はそれを一切気に留めることもなくイエシュアを捕えました。そして復活されたイエシュアを見ても気づかなかったエマオの弟子たち、墓の管理人と見間違えたマリアなど、皆さん、人とはいかに盲目で、耳の聞こえない、鈍感な存在なのでしょう。そして何より神が隠されたものを、人が自らの力で見出すことなど決してできない、ということが上記のいくつもの事実には示されているのです。まさに人は見えていても見えず、聞こえていても聞いていないのです。

さらに人は自分が見たものに対して、自分が好むように見る、自分が見たいように、自分に都合の良いように見る、という傾向、習性があります。以下の記述は聖書で最初に「人が見た」という出来事を記したものです。

創世記【新改訳 2017】

3:4 すると、蛇は女に言った。「あなたがたは決して死にません。

3:5 それを食べるそのとき、目が開かれて、あなたがたが神のようになって善悪を知る者となることを、神は知っているのです。」

3:6 そこで、女が見ると、その木は食べるのに良さそうで、目に慕わしく、またその木は賢くしてくれそうで好ましかった。それで、女はその実を取って食べ、ともにいた夫にも与えたので、夫も食べた。

ここで女すなわち人は、神の目には人が食べれば死ぬというその木を、自分にとって都合の良いもの、自分が好むように、自分が見たいように見たのです。ですから神の目が見るように見ない者の目は、盲目なのです。

ですからこう考えることができます。「多くの聖なる人々のからだが生き返った」というこの事実を見た当時の人々は、この事実に根本から否定して「死人が生き返るなどあり得ない」という、自分の理解、考えに則って解釈し、これを見たのです。その結果、気づかなかった、目を疑った、見ても信じなかったのだと。

2. アブラハムの預言

そしてさらに決定的な根拠があります。イエシュアはイスラエルの父祖アブラハムが、よみ、シエオールの中でこう預言したと述べておられます。

ルカの福音書【新改訳 2017】

16:29 しかし、アブラハムは言った。『彼らにはモーセと預言者がいる。その言うことを聞くがよい。』

16:31 アブラハムは彼に言った。『モーセと預言者たちに耳を傾けないのなら、たとえ、だれかが死人の中から生き返っても、彼らは聞き入れはしない。』

これはある「金持ちとラザロ」という人についてイエシュアが語られたものです。実名が出ていますのでこれはたとえではありません。ユダヤ人はたとえに「ラザロ」などと実名を使わないからです。イエシュアご自身も多くのたとえを話しておられますが、実名は一切使っておられません。つまりこの話は実話なのです。死んだ後、よみで苦しむ金持ちに対してアブラハムは言いました。「モーセと預言者たち」すなわち旧約聖書の御言葉を聞かない、理解しない、受け入れない、信じない者は「たとえ、だれかが死人の中から生き返っ（た者を見）ても、彼らは聞き入れはしない。」と断言、預言しています。そのような事実が、まさにこの時、イエシュアが十字架で死なれた時、エルサレムの人々のうちに起こったのです。この時の民の霊的な目が、いかに塞がれていたかということ、すなわち、当時のユダヤ人指導者たちの教えた、「人間の教え」と呼ばれる口伝律法に支配され、本来の聖書の御言葉を、その真意を知らなかったということが、この時の何も記されていない、という沈黙した状況には表されているのです。そもそも神が隠しておられるものを、人は自らの努力や勉強で見出すことはできません。同様に私たちのうちにある信仰もまた神からの賜物であり、ひとたび神が開いてくださったならば、見えないものでも見ることができます。しかし神が盲目にされたならば、誰も見えていても見えず、聞こえていても気づかず、理解せず、そして信じられないのです。もし今私たちが神のご計画に対して目が開かれ、理解し、信じていることができたら、それはすべて神の側の一方的な選びによるものであり、そのような信仰が神から与えられたことによるものです。ここに決して人を誇らせないための神の配慮、すべて神の御心のままにことなるための神の配剤があるのです。

そして何よりこの聖徒たちの復活の出来事は、福音書に記されたものです。福音書はすべてイエシュアについての記述をまとめたものです。イエシュア以外の存在に焦点が当たるような記述が少ないのは当然なのです。すべての福音書は全体を通して人の弱さや愚かさの中にイエシュアの偉大さが輝くように記されているのです。しかもこれはイエシュアの十字架の死という、私たち教会の信仰において非常に重要な場面なのですから、それ以外のものはここでは隠されているのです。そう、隠されている、まさにこの旧約の聖徒たちの復活の出来事はイエシュアの十字架のかげに、まさに隠された神のご計画の奥義なのです。ですから多くの教会はこの事実の重大さに気づかず、あるいは知らない、解らないとして言及を避け、否定はしないものの注視せず、こんなにも驚くべき、恐るべき出来事をあっさり読み飛ばしてしまいます。このように、旧約の聖徒たち、イスラエルの民の復活は、秘められた奥義なのです。

3. 雲のように

そしてこの奥義はさらに秘められたままの形で、以下のような結末を記しています。

使徒の働き【新改訳 2017】

1:9 こう言ってから、イエスは使徒たちが見ている間に上げられた。そして雲がイエスを包み、彼らの目には見えなくなった。

1:10 イエスが上って行かれるとき、使徒たちは天を見つめていた。すると見よ、白い衣を着た二人の人が、彼らのそばに立っていた。

1:11 そしてこう言った。「ガリラヤの人たち、どうして天を見上げて立っているのですか。あなたがたを離れて天に上げられたこのイエスは、天に上って行くのをあなたがたが見たのと同じ有様で、またおいでになります。」

復活した聖徒たちは、その初穂としてよみがえられたイエシュアとともに、「雲」のようにイエシュアを取り囲み「イエスが上って行かれるとき」にともに天に「上げられた」のです。弟子たちもまたこの聖徒たちに対する目が隠され、彼らにはそれが「雲」のように見えたのです。しかし使徒パウロはこれに対して目が開かれ、ヘブル人の手紙において「雲」のような多くの証人たち（ヘブル 12:1）」という表現を用いています。このように、復活した旧約時代の聖徒たちは、イエシュアとともに引き上げられ、今は天にいるのです。この事実は以下のようにも預言されています。

エペソ人への手紙【新改訳 2017】

4:8 そのため、こう言われています。「彼はいと高き所に上ったとき、捕虜を連れて行き、人々に贈り物を与えられた。」

4:9 「上った」ということは、彼が低い所、つまり地上に降られたということではなくて何でしょうか。

パウロは詩篇 68:18 を引用し、イエシュアについてこのように語っていますが、これは私たちが待ち望んでいる携挙の預言ではありません。なぜなら携挙の際、イエシュアは空中で私たちを引き上げられるので「地上に降られた」という記述とは内容が食い違うからです。これは明らかに弟子たちの見ている前で旧約の聖徒たちを伴って昇天された使徒 1:9 の出来事を指しているのです。そしてここで「人々に贈り物を与えられた」ともありますが、この贈り物とはもちろん永遠のいのちを有した朽ちない身体、復活の肉体ではなくて何でしょうか。このように、旧約の聖徒たちの復活と昇天は、旧約聖書に預言され、そして新約聖書において成就したという、極めて聖書に則した出来事なのです。

4. 前例

ではこの旧約の聖徒たちの復活と昇天は、今の私たちとどのような関わりがあるのでしょうか。それが大いにあるのです。なぜなら白い衣を着た二人の人が「あなたがたを離れて天に上げられたこのイエスは、天に上って行くのをあなたがたが見たのと同じ有様で、またおいでになります。」つまり、また同じように天に上って行く、上らせるようなことを行うために、また来られます、と言ったように、この出来事は同じことがやがてもう一度起こることが定められているのです。それは地上再臨の時ではありません。なぜなら地上再臨時には誰も「天に上って行く」者はいないからです。つまりこの預言は明確に携挙を指

し示しているのです。イエシュアとともに多くの聖徒たちが「天に上って行く」のと「同じ有様」とは、携拳をおいて他にありません。つまりこの出来事は携拳の予告というか、もはやこれは前例であり、携拳は決して真理から逸脱した空想でも妄想でもなく、むしろ逆に極めて聖書的であり、預言の御言葉に則したものであることを論証し、何よりすでに起こった現実が、再び起こり得ることを示唆した、携拳の現実性、真実性を表し、これは比喻でもたとえでもまぼろしでもなく、文字通りに携拳は本当に起こるのだということを大いに論証、立証するものなのです。ですからイエシュアの空中再臨による教会の携拳を信じ、これを待ち望むならば、この旧約の聖徒たちの復活と昇天の事実も、大いに信ずべき、喜んで受け入れるべき事実なのです。

I テサロニケ人への手紙【新改訳 2017】

4:16 すなわち、号令と御使いのかしらの声と神のラッパの響きとともに、主ご自身が天から下って来られます。そしてまず、キリストにある死者がよみがえり、

4:17 それから、生き残っている私たちが、彼らと一緒に雲に包まれて引き上げられ、空中で主と会うのです。こうして私たちは、いつまでも主とともにいることとなります。

たとえ今どれだけ聖書を学んでも、その多くの内容を流暢に大胆に語る事ができたとしても、結論がこの事実を指し示さないならば、それは誰をも励まさない、たとえ励ませてもそれは一時的で見せかけだけのものとなってしまいます。それは結果的にかえって人を落ち込ませ、また新たな悲しみを生み出すものとなりえます。救いをただ漠然と救いとしか教えない福音は、まさに自分の見たいように見る、私的解釈へとつながり、混乱を招きます。この混乱を恐れて、今日多くの教会が携拳を教えようとしません。しかし携拳こそ完全な救いの現われ、実現の時です。携拳以外に希望はありません。なぜなら携拳は復活の時であり、イエシュアの御前に引き寄せられる時であり、永遠に「いつまでも主とともにいることにな」る瞬間だからです。これが救い、これぞ救いなのです。イエシュアが述べておられる「神の国」とは、この携拳の時に成就する出来事が、天だけではなく地においても現わされ、それが永続、拡大、繁栄していくことを指すのです。ですから私たち教会がしっかりと握り、失われてはならないものはこの携拳に対する信仰です。そして人々に教え、伝え、分かち合うべきこともまた然りなのです。

5. 何かにつけ

少し補足…と言いながら結局一つの説教になってしまいました。やはり携拳は私たち教会の目指すひとつのゴール、結末ですから簡単に語り尽くせるものではありませんね。何より偽りや虚しい情報や知識のはびこる今の時代、私たちはできるだけ長く、また多くの時間をこの確かな救いの計画の御言葉に浸る必要があります。私は聖書を正しく解き明かさなければなりません、私の願い、いや私の使命は、何かにつけ、事あるごとに聖書からこの携拳を説き、宣べ伝えることだと思っています。時々近くの結婚式場から依頼されて一般の方の司式の仕事をしますが、その時もこの携拳について大いに語ります。本当の新郎、花婿は神の御子メシアであるイエシュアであり、やがて私たちをその花嫁として迎えに来てくださるのです。ですから教会ではなおさら、これを語らないわけにはいきません。覚えましょう携拳を、そしてその日を慕い求め、待ち望み、今日もイエシュアの御名を呼び求めましょう。